

姫路工業大学ワンダーフォーゲル部20周年記念事業
台湾遠征顛末記

1978年3月12日～25日

- 3/12 姫路発 名倉邸泊
- 3/13 伊丹空港→台北空港 日本料理の夕食、ホテル(長安大飯店)、山岳協会、
- 3/14 台北→嘉義→阿里山
- 3/15 阿里山 シェイ型 SL 排雲山荘
- 3/16 玉山アタック(断念)、排雲山荘、台中、
- 3/17 梨山、武陵(青年活動中心)
- 3/18 七ヶ山荘
- 3/19 雪山アタック、七ヶ山荘、武陵(青年活動中心)
- 3/20 梨山、花蓮
- 3/21 花蓮→台北、ホテル(長安大飯店)
- 3/22 台北市内観光(故宮博物館ほか)、教師会館
- 3/23 台北市内観光(龍山寺ほか)
- 3/24 台北市内観光(白雲山荘ほか)
- 3/25 台北空港→伊丹空港、帰国

兵庫県立姫路工業大学ワンダーフォーゲル部の20周年記念事業として台湾遠征を実施した。今般、50周年事業の一環として、その遠征について、つらつらと記憶をたどって書いてみることにした。あくまでも私の記憶にあることなので、正確さは期待しないでいただきたい。つまみ食いのように読んでいただけたら幸いです。

思い出したり、遠征メンバーからの指摘があれば、訂正したいので、よろしくお願いします。

☆準備

○パスポート

- ・当時(1978年、昭和53年)は、預金残高が往復の飛行機代以上あることがパスポートを取得する際の条件の一つだった。今では考えられないことだけど、実際に係官の目の前に預金通帳を提示しなければいけなかった。残高が不足していたらどうするか。親や兄弟の通帳とその残高を旅行に使っていいという承諾書を提出しなければいけなかったという、ある意味、屈辱的(?)なことを強いられたのだ。かくいう私も残高不足を指摘され、親の通帳と承諾書を持って再度、係官のもとに参上したのである。

○空港・・・出発(3/13)

・やっときでパスポートを取り、8人で伊丹空港にそろった我々であるが…。

あつ、ここでメンバーを紹介しておこう。

当時2回生 名倉、秀平、本岡、広瀬

1回生 金沢、名倉、法田、伊藤(順不同)

の8人である。

姫路を発ったのが3月12日、その夜は豊中の名倉(当時1回生)邸に泊めていただき、そこからジャンボタクシーで伊丹空港に向かったのだった。

当時の航空券が残っていた。キャリアーはノースウエストオリエント航空(ノースウエスト航空の太平洋路線会社で東京をハブとして運航)で、運賃は8万4800円。当時としてはけっこう高額だったけど、格安のTICKETなどがない時代なので、多分これが最安値だったんだろう。

NW009便 OSA発0900となっている。

機内の記憶はほとんど無いが、写真を見るとすでにユニフォームとニッカ、ドタバ靴といういでたちであった。服装なんかまったく気にしていなかったようだ。

確か全員が初めての海外だった(はず)で、余裕が無かったのも一因かもしれない。

アルバムを見ると最後までユニフォームを着た写真しか残っていない。着ずっぱりだったのだろうか…。まあいいとしよう。

☆到着

○現地空港

・当時の台湾は非常に厳しい状況で中華人民共和国とは戦闘状態であるという国情であった。それ故に持ち込み品も制限されていて、日本語の新聞、雑誌は持ち込み禁止、没収である。見事に引っかかったのは法田君である。というか、自ら新聞を係官に見せて、素直に手渡したのだ。彼曰く「ほんとに没収されるか試してみた」とのことだった。

○市街

・まさに戦闘状態であり、街中には銃剣を付けた銃を持った兵士がそこそこいた。生まれて初めて銃を向けられたときのことは鮮明に覚えている。こちらはただ歩道を歩いているだけなのに、大きな施設の前にいた兵士がこちらに銃口を向けてくるのである。いま考えると引き金には指を掛けていなかったのだろうけど、「一歩間違えば」と思うと震えが止まらなかった。

○山岳協会

・当時、台湾の山に登ろうとすると、入山認可費用を支払い、現地の山岳協会のガイドが同行するのが条件だった。というか、前記のような国情なので、もちろん地図など無く、ガイドさんが同行してくれないとどこにも行けないのである。あつ、地図は協会に渡してくれるのだが、尾根筋などを書いたまったくの略図であった。

そうそう、当時の習慣として、「山岳協会にお土産を持っていく」ということがあった。他校(我々の前に東京の有名私立大学が入山していたらしい)はかなり高価なものを持って行ったらしいが、我々は貧乏公立大学生でもあり「電卓」を持っていった。それを見た山岳協会の面々の反応は…書かないことにする。

- ・我々に付いてもらったガイドさんは「ショウさん」という方で、当時40代程度だったろうか。山岳協会で引き合わされてから台北の空港を発つまでほぼベッタリと「ガイド」していただいたのである。

○タクシー…線香、イルミネーションチーローウンター(姫路工大)

- ・その日の晩飯は確か日本料理屋に連れて行かれたと記憶している。そう、よく勘違いされるんです。「日本から来たから日本料理が食べたいだろう」と。こっちはきのうまで日本料理を食べていたのに…。海外出張に行っても「伊藤さんよく来てくれました。さあ日本料理屋に行きましょう」と連れて行かれることがよくあった。まあ出張の場合は現地の駐在員が、日ごろ日本料理が食べられないから、出張者を出汁(だし)に日本料理を食べようという魂胆で、ここで「プライムリブステーキが食べたい」などというヒンシュクを買うのである。話を戻すと、まあ先方の好意で日本料理屋さんを紹介してくれたのだろうけど、何せ高い。こっちは貧乏地方公立大学生である。東京の有名私立大学生とは違うのである。ガイドのショウさんには事情を話し、次回以降はコストパフォーマンスに秀でたレストランを紹介してもらうことにした。
- ・この夜の移動はタクシーを使った。このタクシーがまた印象的で、鮮やかに覚えている。車内にお香の香りが満ちているのである。「ほほう、なかなかいい香りだなー、けどちとキツイかな」などとドライバーのほうを見ると線香がモクモクと煙を立てているのである。そりゃ香りが満ちるはずだ。さらに何かキラキラしている。シフトノブとインパネ周りにイルミネーションが存在感をアピールしているのだ。ヤンキータクシーお香付である。そして運転手が非常にフレンドリーだった。日本語は話さなかったが、身振り手振りで「どこから来た?」「どこに行く?」「何しに来た?」などと話しかけてくる。そうそう、ユニフォームの胸に書いてある「姫路工大」の文字を見て読み方を教えてくれた。「チーローウンター」と発音したはずだ。しかしこれらを、いちいち振り返って話しかけてくるのである。印象では三分の一くらい振り返っている感じだった。「チーローウンター(ドライバー)」「チーローウンター(私)」「(満面の笑みで)うまいまい!(と言っている感じ)」。いいからいいから、前を向いて運転してください…。

○ホテル

- ・ホテルはやはり「東京の有名私立大学様」仕様なのだろう、たぶん高級なほうのホテルだったとおもう。ここでの印象はテレビ番組。ガッチャマンをやっている

た。英字新聞の番組表には「チャッカマン」と書いてあった。ガツチャマン、発音しにくいのかな?あとはルーツ。あの「クンタキンテ」をルーツとするアフリカ系奴隷の物語である。日本では前年の夏に放映されて大ヒットだった。朝飯はお粥である。副菜にキュウちゃん漬けと塩で炒めたピーナッツがあった。しかし、我々の意識はこれから山行きのことで頭がいっぱいで、ただただ、かきこむだけだった(?)

☆いざ山へ(3/14)

○台北駅から特急列車で嘉義へ

- ・台北駅から特急列車で台湾中南部の嘉義に向かった。

たぶん良いほうのシートだったのだろう。ゆったりしていてカーテンも付いて「お茶」までもが付いていた。お茶はどのように付いていたのかというと、それぞれの席に蓋付きのガラスのコップが置いてあり、その中に茶葉が入っている。列車が出発してしばらくすると、大きなやかんを持ったお姉さんが回ってきて、鮮やかな手つきでコップにお湯を注いでいくのである。1つのコップに3秒もかからない早業である。ついでに言うておくと、茶葉はティーバックなどではなく、むき出しでコップに入っている。これを飲むのが素人にはなかなか難しいのである。ガイドのショウさんら現地の方を見ていると、器用に蓋を使って茶葉を漉しながら飲んでる。

昼ごろになると弁当を売りに来た。「ペントウペントウ」と言いながら売り子さんが回ってくるのだ。2段重ねのステンレス製の弁当箱(もちろん回収される)に入った超豪華なお弁当だった。考えてみると、今回の遠征で初めて中華料理らしいものを食べた気がしたのが、この弁当だった。

○嘉義(チャイー)から阿里山

- ・嘉義に到着すると(何時間掛かったとか全く記録&記憶無し)、こんどは阿里山森林鉄路で阿里山に向かう。この鉄道はゲージが狭く、トンネルが多かったことを記憶している。ゲージが狭いので、座席は2+1の3列シートだった。阿里山は山の中の景勝地で、巨木が立ち並び、2つの神秘的な池があり、観光客も多く滞在していた。ここで一晩過ごして、翌日から本格的な山行きに入るのだ。

○水…必ず煮沸

- ・台湾での生活で必ずやらなくてはいけないこと、それは毎朝お水をもらいに行くことだった。台湾では必ず水を煮沸してから使う、というか飲む。生水は飲まないのだ。だから台湾の主婦の毎朝一番の仕事は水を煮沸して飲み水を作ること

なのだ。で、我々の食当、法田君の仕事も朝、お水をもらいに行くことから始まるのだった。

○アンシンメトリーのSL(3/15)

・阿里山から登山口に行くのだが、ガイドのショウさんが駅でなにやら交渉している。その日にたまたま列車が出るので、登山口まで乗せてくれという交渉らしい。めでたく列車に乗れることになったのだが、その列車を見てびっくりである。機関車はSL、アンシンメトリーのシェイ型という超レア物である。金沢君は「おお、これを見たかったんや」と感激していた。このシェイ型の機関車が前引き後押しするのである。超レア物のシェイ方SLが前後についた列車、なんともまあ贅沢な光景なのだ。

で、この列車、山奥で切り出した木を運ぶためのもので、トウゼン客車など無い。あるのは無蓋車が何両か。あっ、無蓋車といっても色々あって、機関車の後ろで石炭と水を積んでいるのも無蓋車だし、檻のようなものが取り囲んでいるようなものもある。我々の列車のそれは、フラットな荷台があるだけで、手すりも何も無いところにザックと我々が乗るのである。車上の写真を見ると、無邪気に笑っている。若かったのだなあ。そして列車(?)はどんどん高度を上げていくのだった。

○彼らの交渉

・余談だが、彼らの交渉はすさまじい。列車に乗せてくれとお願いしたり、ホテルに泊めてくれとか、この食堂でこの料理が食べたいなどという注文の際に「交渉」をするのだが、はたから見ているとほとんど喧嘩である。怒鳴りあうのだ。言葉が分からないから本当に喧嘩しているようにしか見えない。見ていてはらはらドキドキする。で、交渉が成立するとにこやかに握手したりする。はらはらしていたこっちが損しているようなものだ。遠征の後半になってやっと慣れてきたが、「主張すべきことは、はっきり言う」という以上の主張の仕方に戸惑ったものだった。

○玉山(新高山)へ・・・急な山道、排雲山荘、高山病

・列車(?)を降りた我々はガイドのショウさんを先頭に山道に取り掛かった。いやあ登る昇る、どんどん登っていく。目指す玉山(新高山)は標高3997メートル。富士山よりもはるかに高いのである。阿里山の標高は2250メートル、この日の目標地点である排雲山荘は3402メートル。シェイ型SLでけっこう稼いだとはいえ、千メートル近くは登らなくてはいけないのである。ちなみに現在の玉山の標高は3952メートルとなっている。いつの間にかダ

イエットしたのか？何通りかの測定結果があり、当時は最高値をうたっていたのだろう。ショウさんは「標高が3997メートルで、頂上に3メートルの塔が立っている、そこは標高4000メートルだ」と言っていたのを思い出す。登り始めは曇りで、コンディションは良かったが、やがて3000メートルを超えたくらいからとたんに寒くなってきた。あたりに雪が積もっていて、雪のトンネルも出てきた。この雪のトンネルは、実はこのようにできている。左側が山側、右側が谷側の山道を歩いているとしよう。左側の斜面に生えている竹に雪が積もり、その重さで大きく湾曲して先端が谷側の斜面に付いてしまう。そのまま冷えて、竹の上の雪が凍って雪のトンネルとなるのだ。

やがてこの日のお宿、排雲山荘に着いた。標高3402メートルの山荘は暗く、蔴きを燃やす匂いで満ちていた。

排雲山荘は玉山登山の最終地点キャンプ(?)で、今でもここから玉山に登っているようだ。

我々の他に何組のパーティがいたかは全く覚えていない。ここでの記憶は蔴きの匂いと標高が高いゆえのゴツチン飯だけだったか。このときの飯はかなり固かったようだ。秀平さんのサブリ報告によると「気圧のせいかな飯がかたい。あの伊藤でも食わないくらいだ。」というからよっぽどだったのだろう。

あっそうそう、大事なことを忘れていた。高山病だ。この日の夕方くらいから私の頭が痛くなった。いつもの偏頭痛かと思っていたが、あとで考えてみると高山病だった。私は医療担当だったが、高山病など全くケアしていなかった。危機意識ゼロといわれてもしょうがないくらいだ。けっきょく頭痛は翌朝の出発前まで続いた。

○玉山アタック、断念、台中へ(3/16)

- ・高山病(とは露知らないアホ)持ちの1回生約1名を含む8人の姫路工大ワンダーフォーゲル部20周年記念台湾遠征隊は、玉山アタックに向かったのだった。貧乏公立大学生の我々は当然、満足な雪山仕様の装備など無いので、天候が悪ければ登り始めることさえできなかったが、日ごろの行いがよかったせいか、登り始めから天候が良くなり、排雲山荘に戻るまで好天に恵まれた。雪の道を登る、登る。

山荘から頂上まで、当時は600メートル弱の高度差である。急ピッチで登り始めた。なかなか快適なペースである。私の頭痛も軽くなってきた気がする。と、ある大雪渓をトラバースしようとするやうに突然、ショウさんから重大発表があった。「何日前に地元の人が、ここをトラバースするときに滑落して、亡くなった。ここから先に進むのは危ない。」と言うのだ。なんで、今ここでそんな話をするのかと、あとになって思うのだが、そのときは滑落したら止まりそう

にない大雪渓を目の前にして「これはヤバそうやな」と登頂断念を衆議一致したのだった。そう話が決まったところでショウさんが玉山の頂上を指差した。はるか彼方にある玉山の頂上にキラリと光るものがあるのだ。「あれが玉山の頂上にある塔です」とショウさん。おお、あれが頂上か・・・と、みな納得したのであるが、どうもこれはショウさんの作戦だったのではないかと今思う。滑落死亡事故の話は本当だったのだろうか。今となっては確かめようもないが。

○下山・・・花梨園ヘトラックの旅

・登頂を断念した我々は、排雲山荘に戻り、次の目的地である大雪山(だいせつさん)を目指し、とりあえずこの日の目的地、信義に向かった。排雲山荘から林道まで降りた我々は、運良く伐採した木材を運ぶトラックに同乗させてもらうことができた。荷台には木材を満載していたが、その上に我々がザックを座布団代わりにドライブというわけだ。いやいや、我々というのはウソで、ショウさんと私(伊藤)の2名だけがキャビンに座らせてもらった。ショウさんはガイドの特権(?)、私は高山病の頭痛が回復せずで座席に座らせてもらったのだ。狭いキャビンのベンチシートに運転手、助手、ショウさん、伊藤と4人座ったのでひどく狭かったはずだが、荷台に比べれば天国で、文句は言えない。何時間かのドライブの末、昼過ぎには信義に到着した(はず)。信義からはバスで台中へ行ったと記録には書いてある。すいません、ぜんぜん覚えていません。

○台中

・うーん、よく覚えていません。高山病から回復しようとして、体力がそちらに取られ、記憶には何もプリントされていないのかも。ということで、台中のお話は何もなし。思い出したら追記することにしよう。

○武陵へ(3/17)

・たぶんワープしたんでしょう、そうでなければ転送されたはず(Beamup!)。全く記憶がありません。記録によると延々とバスで移動したようです。でも途中の梨山はすこし覚えているかな。きれいな観光地だったような・・・。けど、それだけ。この夜は武陵の青年活動中心というユースホテルに泊まった(らしい)。青年活動中心を法田君はユースアクティブセンターと名訳した。

○七卡山荘へ(3/18)

・あーっだめです。ここまで書いてきても記憶が起きてこない。断片はちよくちよく出てくるけど、時制がはつきりしない。ここら辺の3日間に起きたことが

ごっちゃになっている。そうそう、金沢君の体調が悪くなった。こんどは高山病ではなく、食あたりだろうか。水に当たったのかも。体調を維持するのは難しいものだ。そうだ、カレーを作ろうと麓(ふもと)でジャガイモを買ったのだが、いざ作る段になるとガイドのショウさんと山小屋の管理人のおっちゃんがそれを見て大笑いしているのだ。聞くとジャガイモと思っていたのは実はサツマイモだというのだ。まさか買い直すために麓まで行くことはできず、その夜は薩摩芋のカレーディナー初体験となったのである。

○七卡山荘から大雪山を経て武陵へ(3/19)

・やはりここでも記憶は断片しかない。記憶は突然アプローチから見た雄大な褶曲断面から始まる。天気は絶好ドピーカンだ。谷を挟んだ対岸にある山が、見事な褶曲断面をさらしている。堆積層が隆起して3000メートル級の山になっているのが良く分かる。

○名も無いピークに登頂、下山

・さて、ガイドのショウさんの体調が悪いようだ。遅れる。ついてこない。で、山道は一本道なので我々は先に行く。ところどころでショウさんを待つようになった。天気はサイコーで、快調に歩いていたことを思い出す。と、なぜか道を外れてしまったようだ。前の晩に雪が降って、雪の上にあるはずだったトレースが見えなくなってしまったのだ。そして我々は小さなピークの上に到達したのだ。秀平さんの SL 報告によると長特蘭山(3690m)とのことである。ここからの大雪山の眺望はすばらしいものだった。そしてそのピークにはショウさんは到達しなかった。
小休止のあと、七卡山荘を経て武陵の青年活動中心へ向かった。この日はここで泊まった(はず)。

☆梨山、花蓮(3/20)

○花蓮

・花蓮は東海岸の中ほどからちよいと上のほうに位置するきれいな町である。花蓮での宿はきれいなホテルだった。当然、宿代は高いはずだが、ここでまたショウさんの交渉である。いやいや、横から見ているとどなり合いのようだった。何回見てもこの「交渉」は見慣れない我々であった。やはり食事などは覚えていない。

☆花蓮から台北へ、最初に泊まったホテル(3/21)

○東海岸の一方通行、サービスエリア

・台北までは台湾の東海岸をバスで移動する。東海岸は西岸と違って断崖絶壁が

続いていた。道幅は一車線しかない。片側一車線でなく、全部で一車線なのだ。で、途中に何箇所か待避所ができていて、交互通行を行っているのだ。当然、待避所はサービスエリアの役割を担っている。担っているのか、呼ばれてもいないのに店が進出してきたのかは知らないが、土産物屋やら飲み物を売る店やら食べ物屋台やらが、わんさか店を出していた。中でも小さな巻貝を塩茹でしたものと、生姜のきいたモツ汁はいい味をしていた。そしてバスは台北に。

○最初に泊まったホテル

- ・なぜまたこのホテルに泊まったのかというと、初日に泊まったときに、不要な荷物…バス(ホエーブス:現役諸君はまだ使っているのだろうか)、テントなど…をここに預けていたのだ。逆に言うと、無駄なものを持っていったということにもなる。ということでここに一泊したのだ。で、翌日から流浪の民となる我々だった。

○救国団訪問、台北観光(3/22)

- ・1 回生の名倉君のお父様には、出国前の前泊にとどまらず、台湾国内での活動に色々とお世話になった。その関係から救国団をまず訪問した。その後この日の宿泊場所となる「教師会館」に行き、荷物を置いたあと台北観光に出かけた。この日の宿の教師会館は、台北ナビというサイトによると「もとは教職者専用の宿泊所でしたが、4年前から一般の方にも平日の宿泊を開放するようになり」とあり、当時は(多分)我々は泊まれなかったはずだが、先述の名倉君のお父様の影響力で泊まらせてくれたのだと思う。

この日からはガイドのショウさんだけでなく、ショウさんの奥さんも同行することになった。奥さんも日本語をそこそこ話されたと記憶している。まず故宮博物館に向かった。ここは(いい意味で)とんでもないところで、いろいろな名品がこれでもかと展示されていた。ここで気がついたことがある。日本人が多い。ここまでは日本人にあまり遭遇しなかったが、というか、あまり日本人が行かないところばかり行っていたが、台北の故宮博物館といえば、まずどんなツアーでも組み込まれていたはずで、当然そこには日本人がうじゃうじゃしているのは無理もない。海外で日本の旅行者に会うと何か損をした気分になってしまうのは私だけだろうか。記録によると故宮博物館のあと蠟人形館、お土産屋さんに行ったことになっている。

○台北観光、華宮旅社泊(3/22、23)、

- ・こちらあたりから台北での記憶が時系列で並べられない。色々なシーンが断片的に浮かび上がってくるだけだ。ということで、記述も断片を羅列することにし

ます。まあ、こういうことがあったんだなあということで見てください。

○ 台北での宿泊先、華宮旅社。

・この日はまずあと2日滞在することになる宿に向かった。この宿はとんでもないところだったというか、貧乏公立大学生であることを終始アピールしていたからか、ピッタリの宿を探してくれた。ロケーションがすばらしい。地元の方々が行かれる市場の中にあるのだが、この市場がすばらしい。神戸の元町高架下商店街に東京アメ横の品揃えという感じの市場だ。お肉屋さんでは豚の鼻のスライス(丸の中に縦長のだ円が2つ並んでいる)が並んでいてびっくりしていると、上から豚の顔の皮が吊り下げられていてさらにびっくりするという具合だ。その市場をどんどん進んでいくと、小さな路地がありその奥に宿がある。狭い部屋でバス、トイレは付いていなかったかな。セミダブルに2人で宿泊した。いま考えると木賃ラブホだったかもしれない。Google で検索しても日本語のページがないのはもちろん、ここを紹介している日本語のブログも見つからないというほどコアなロケーションである。

○ 台北で一番有名なお寺、龍山寺。

・宿に荷物を置いてから、台湾で最も歴史のあるといわれているお寺「龍山寺」へ、ド派手な装飾を施した建物の前には、もうもうと線香の煙が渦巻いていて、いかにも中華的なお寺だ。このお寺には多くの占い師がいて、それが名物とのことだった。もちろん占ってもらったが、結果は言わないでおく。あつ、忘れました。

○台北北部の蘭園、白雲山荘。

・台北北部の陽明山にある蘭専門の植物園「白雲山荘」に行った。暖かい台湾で、さらに温室を作って蘭を栽培している花園だ。たしか検疫も済んでいる花を販売していたように思うが……。色とりどり、様々な種類の蘭が咲いていた。今そのときの写真を見てもいかにも我々と似合っていないのが良く分かる。さらに似合わないことに、ここでおしゃれなランチをいただいた。これはガイドのショウさんの奥さんの趣味だったのかも。きれいなところでした。

○屋台での晩飯

・22日だったか23日だったか、一回生4人で晩飯を食べに出た。屋台である。いわゆる東南アジアの屋台だから、博多のような屋台ではなく、常設だ。常設なのが屋台かという疑問があるが、木の柱と何かで葺いた屋根からできているのだから、屋台という区分が適当だろう。で、4人でふらふらと屋台におもむいた。いくつかひやかしたあと、食べ物屋に入ったが、当然、メニューがわか

らない。全く意味がわからないのだから、どうしようもない。我々は周りで食べている人の食べ物を指差して「これっ」「これっ」と次々にオーダーしてテキストに食べることにした。これがけっこう当たりで、どれもうまかった。ただ、豆腐とか野菜ばっかしだったような気がするが、メニューが読めないからしょうがない。そうそう、このときだけは料金を覚えている。たしか4人で600円だったはず。そのあと果物やジュースを飲んだ記憶がある。

○台北のショウさんが案内してくれた怪しいところ

- ・ヘビを食べさせるところ・・・毒蛇を店先のカゴに入れてある。ヘビ嫌いのサルの手で生きたヘビの首を握らせ、縛り付けるところを見た。サルは手を目いっぱい伸ばしているのだけど、手にはしっかりとヘビが握らされている。毎日やらさせているのだろうけど、慣れないんだろうなあ。店先には既にさばいたヘビが30匹ほど束になってつるされていた。それをツツツン突いて回していると、トツゼン一匹がくるくと巻き上がってきた。びっくりしたのなんの。もともとヘビ嫌いの私が筋金入りのヘビ嫌いになった瞬間だ。
- ・カラオケ屋・・・怪しい通りの怪しい店の怪しい階段を降りていくと、怪しいカラオケ屋があった。日本からの駐在員が通っている店と言っていたと思う。日本語の歌がかかっていた。すぐに出て行ったと記憶している。なぜだ？

○レコード屋

- ・名倉と一緒に夜の怪しい台北市街を散策していた。とレコード屋があった。そうだレコードを買って帰ろう、ということで店に入ったら、なんともかわいらしい女の子のジャケットが目飛び込んできた。鳳飛飛(フォン・フェイフェイ)という名前で、帽子が印象的だった。日本の歌手のカバーも何曲か入ったLPを買った。調べてみると彼女はまだ現役で歌手をやっているようだ。30年以上ということになる。以前(93年頃)、台湾の提携企業からやってきたエンジニアに鳳飛飛の話をしたら彼らも知っていたが、こんなに息の長い歌手だったとは。レコードはまだあるが、残念ながらこのメディアは再生できない。

○現地の女の子・・・おうち、チマキ

- ・レコード屋で我々2人に声をかけてきた女の子がいた。「日本から来られたのですか」と。聞くと彼女のお母さんが日本の方で「母が喜ぶますからぜひ来てください」と家に連れて行ってくれた。こちらは夜だし、初対面だしということとで固辞したが(実際10時はまわっていたのではないかと)、半ば強引に連れて行かれた。お世辞にもきれいなところではなかったが、「台湾の普通の家」を始

めて見てなぜか懐かしくなった。そこは子供の頃のおばあちゃんの家のようなものだった。台所は土間で、まきを使うヘツツイさんが置いてあった。居間もそんなに広くなかったが、温かい空気がある家だった。呼びかけに応えて出てこられたお母さんは、女の子の年齢(確か15、6だったかな)からすると、意外とお年を召されていたようだった。我々が行くと非常に喜んでくれて、色々話をしてくれた。ご主人は台湾の方で、子供さんはその女のこのほかに何人かおられたとおっしゃっていた。よく覚えていないが、名倉が日本にいるはずの親戚の方へのことづてを頼まれていた。

翌朝、彼女がわざわざ宿にチマキを持ってきてくれた。作り立ての中華チマキである。栗、卵、豚肉などが入っていて、あ那时的チマキ以上のものをまだ食べたことがない。思いもかけないところで、一般の方との交流ができた。まして日本から移られた方とその家族とである。やはりうろうろしてみるものだなあ。

☆帰国

○空港

- ・帰国したんだろう、多分。記憶がない。みんなそろって姫路に帰ったのかな。名倉は実家に戻ったのかな。それまでがあまりに密度が濃かったのかな。記憶から飛んでしまっている。30年前だからしょうがないか。

○キャンディーズ

- ・なぜキャンディーズ??? キャンディーズが何であるか言わない。問題はなぜここでキャンディーズか、である。この年、1978年4月4日にキャンディーズの解散コンサートが開催されたのだ。特別にキャンディーズファンではなかったが、世間並みに見ていた。帰国すると彼女たちのクライマックスに向かって、盛り上がりは絶頂を迎えていた。ということで台湾遠征の時を思い出すのに、時制的にキャンディーズがピッタシなのだ。それだけ。そう、あれから30年経ったのだ。